

史料からみた

芸州廿日市津和野藩御船屋敷設置年と

江戸浅草天文台詳細図

1. 津和野藩の概観

因幡国気多郡鹿野（いなばのくに けたぐん しかの・現在の鳥取県鳥取市）一万三五〇〇石の初代藩主であった亀井茲矩（かめい これのり）は、慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原の戦いにおいては東軍に属し、三万八〇〇〇石に加増された。

因幡国鹿野藩第二代藩主政矩（まさのり・茲矩の子）の代になると四万三〇〇〇石に加増され、元和三年（一六一七年）には石見国鹿足郡津和野（いわみのくに かのあしぐん つわの・現在の島根県鹿足郡津和野町）四万三〇〇〇石に転封（てんぽう）となる。石見津和野藩初代藩主・津和野藩亀井家二代の誕生である。

明治四年（一八七一年）廃藩となるまで、十一代 茲監（これみ）まで二百五十余年存続した。来る来年の二〇一七年は、津和野転封（てんぽう）四〇〇年となる。



津和野城址 別称：三本松城

2. 史料説明

◆史料5号 津和野藩亀井家の廿日市船屋敷に関する記述 元和6年（1620年）

本史料は、津和野藩亀井家の廿日市船屋敷に関する初見のもので、元和六年（一六二〇年）に広島藩より同家へ船屋敷が寄贈されたらしく、内容は同家の謝礼に対する返報がおもである。

来る二〇二〇年、四〇〇年となる。

津和野藩は、参勤交代などに際して津和野街道を南下して廿日市に止宿し、此処から海上を通過して室津（兵庫県）へ上陸するコースをとっていたが、廿日市には陸上と海上を結ぶ要津として、用船・船頭・常詰長屋などが常備された体制が完備されるのは、寛永七年（一六三〇）以降のことである。

（廿日市町史 資料編Ⅲ 六頁～）

◆史料7号 津和野藩は使い船屋敷地借用方折衝に関する記述 寛永7年（1630年）

津和野藩が廿日市に「船着ノ蔵屋敷」を置いたのは元和六年（一六二〇）である（史料5号）。

この段階では参勤交代などに際して利用する私的な宿泊施設はまだ整っておらず、そのため本史料によると同藩は、廿日市商人鳥屋七郎右衛門方へ宿泊し、不便であった。

本史料は、新しく廿日市内へ宿泊施設を望んだ津和野藩が、御往来本陣鳥屋市右衛門と廿日市庄屋山田治右衛門を仲介にして、広島藩へ用地の提供を願い出た記録である。

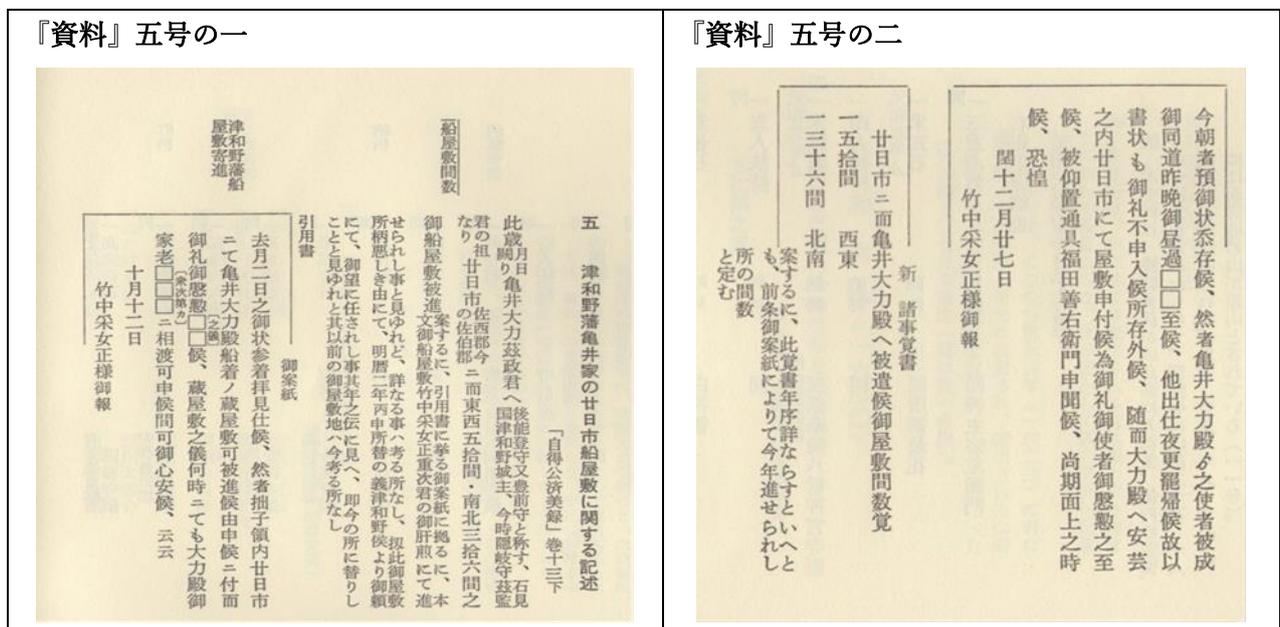
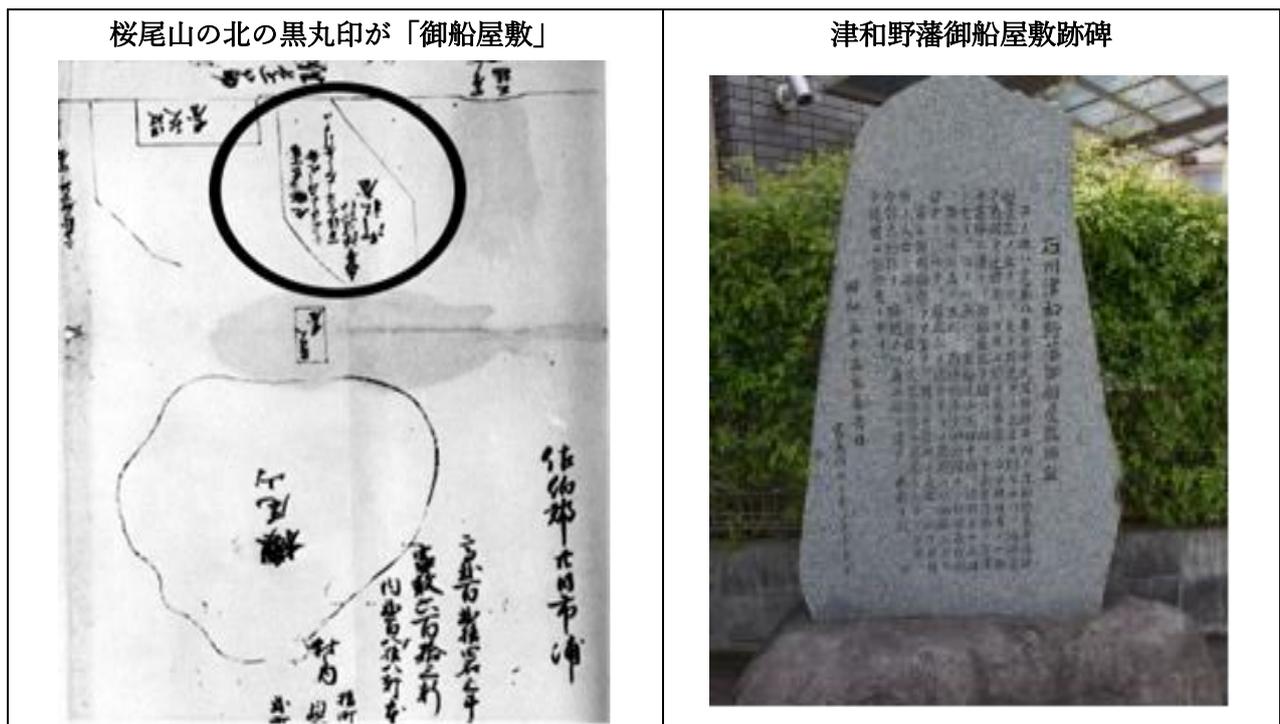
◆史料10号 津和野藩廿日市船屋敷地引き渡しに関する記述 寛永8年（1631年）

本史料は、前年（寛永七年）津和野藩から願い出された船屋敷地の借用のついて（7号史料）、広島藩より同用地の四至（しいし・所有地）を明示して貸し下げを許可したものである。同時に船入地についても同様の措置が取られた。

本史料は、津和野藩からの廿日市船入地移転についての依頼状、およびその承諾を申し渡した書状と思われる。

これまでの船入地は、桜尾山東麓のエボシ岩あたりに置かれていた（10号史料）が、次の廿日市町絵図にみえる船入地および「御船屋」は桜尾山北側で西国街道に面した位置にある。

（廿日市町史資料編Ⅱ附録 正徳年間絵図
（一七一一～一五）絵図の黒丸印）



『資料』七号

寛永七年（一六三〇）

七 津和野藩廿日市船屋敷地借用方折衝に関する記述

〔津和野亀井記〕二

一 寛永七年三月廿五日 多胡主水殿芸州広島へ為御使者被遣、右者是迄御入国後上方御往来廿日市ニ而鳥屋七郎右衛門方へ御泊り之所、往々御不弁利ニ付芸州廿日市駅ニ而船場土地御借用、御茶屋出来候へハ後年御弁利ニ付此内ノ内々下掛合致、御往来御本陣鳥屋市右衛門・廿日市庄屋山田治右衛門兩人へ御内命有之、兩人広島御役筋へ及掛合候処御模様宜敷ニ付、主水殿表向為御使者御越御役人中へ面会入々御頼御談判有之御引取、同年十一月御相談首尾能相整御許容之御返答有之、依而同月十六日主水殿為御挨拶御進物数々被遣、御使者御勤御引取之事

『資料』一〇号

御船入地

一〇 津和野藩廿日市船屋敷地引き渡しに関する記述

〔津和野亀井記〕二

一 寛永八年五月十八日、廿日市御借用地御引渡可被為

編年資料(寛永七―向八)

成旨ニ付、為受取津和野ノ船屋甚作・中川八助被遣、広島御出役郡代天野十左衛門代官山田権助出役廿日市庄屋治右衛門罷出、地形纏引地処被引渡、尤其碕鳥屋市郎右衛門も立会御引渡地処左之通

一 御借地只今迄有来之御茶屋之土地者佐伯郡廿日市桜尾城山西土居八幡宮之社地、佐伯郡蔵元^{米津出}場^{共有}同地弥右衛門屋敷ト申ス地、長五十一間横四十間、浜手有次第、左之通

桜尾之方屋敷東側

一 竹敷之方四十間

御方大屋方

一 北之方五拾三間

廿日市町之方

一 西之方五拾三間

浜之方

一 南之方五拾四間半

右者二十三間半堀覆之内六間ニ十三間三尺、浜手有次第

一 御船入者桜尾城山林麓東之方

一 淡岸畑ノ鳥帽子岩迄沖之方三十三間

一 淡岸畑柱横七間半

廿日市町史資料編Ⅲ

一 山ノ手百拾九間

一 鳥帽子岩横二十間

右之通御渡有之、出役之面々追而御目録被下、庄屋山田治右衛門本陣鳥屋市郎右衛門へも御称美御銀被下置候、其後追年御買添地有之、御殿始御船蔵・土蔵・定詰長屋出来、御船頭主御抱室津も定詰被差廻追々出来、其後廿日市ノ室津之御通船被仰出、委細御召船始御屋敷一件別書有之

廿日市より室津へ通船

(参考文献)

「廿日市町史 資料編Ⅲ」編集発行 廿日市町 昭和 52 年 3 月 2 0 日 所蔵/はつかいち市民図書館蔵

江戸浅草天文台詳細絵図

平安時代の貞観四年（八六二）から中国の宣明暦（せんみょうれき）をもとに、毎年の暦（こよみ）を作成してきたが、江戸時代に入り、暦と日蝕（にっしょく）や月蝕（げっしょく）などの天の動きが合わないことが問題となる。

貞享二年（一六八五）、渋川春海（はるみ）によって、初めて日本人による暦法「貞享の改暦」が作られた。天文方は世襲制であったが、時には天文学に通じた人物を追加あるいは養子縁組して世襲を許したため、幕末までに渋川家、猪飼家（いかいけ）、西川家、山路家、吉田家、奥村家、高橋家、足立家の八家が任命されている。

天文方の各家

・ 渋川家

渋川春海（はるみ）の改暦の功績により貞享元年（一六八四）天文方となる。養子縁組を繰り返しながらも幕末まで継承された。

渋川春海（はるみ） | 昔尹（ひさただ） | 敬尹（ひろただ） | 敬也（ひろなり） | 則休（のりよし） | 光洪（みつひろ） | 正清（まさきよ） | 正陽（まさてる） | 景佑（かげすけ・高橋高橋至時よしときの次男） | （敬直（ひろなお） | 佑賢（すけかた） | 敬典（よしのり）

堀田仁助の師・・・渋川正清（寛保三年（一七四三） 寛政十一年六月十五日（一七九九）七月十七

日は川口流清の子で渋川光洪（みつひろ）の養子。通称孫次郎・主水（もんど）。明和八年（一七七七）に叔父の渋川光洪に子供が無いま没すると、末期養子（まつごようし）として家督を継承して天文方に任命された。

だが、度重なる当主の急逝（きゅうせい）と養子縁組によって、渋川春海以来の家学（かがく）が事実上失われ、天文方は吉田秀長や山路主任（ぬしづみ）によって運営されていた。更に宝暦暦の改暦の事実上の失敗によって、天文方が改暦の実権を取り戻した中で行われた寛政暦改暦も高橋至時らによって行われ、渋川正清はほとんど関与をしなかった。養子の正陽（まさてる）も正清の実家から迎えられた養子であったことから、渋川家は天文方の筆頭の家柄でありながら、光洪（みつひろ）・正清・正陽と三代にわたって名ばかりの存在として扱われることになった。

・ 猪飼家（いかいけ）

御徒（おかち）であった猪飼正一（豊次郎）が享保元年（一七一六）渋川敬尹（ひろただ）の暦作御用手伝となり、元文元年（一七三六）天文方になる。寛保元年（一七四一）に正一が没すると後継者なく一代限りとなる。

・ 西川家

長崎の天文家である西川如見（にしかわ じょけん）の息子である西川正休（まさよし）が徳川吉宗によって天文方に招聘（しょうへい）され、延享四年（一七四七）天文方となり二代続く。

西川正休（まさよし） | 忠喬（ただたか）

・ 山路家

山路主住（やまじぬしづみ）が宝暦の改暦（宝暦暦）の際に渋川則休（のりよし）と西川正休（まさよし）の補暦御用手伝となり、明和元年（一七六四）に天文方に任命されたのに始まる。二代目の之徹（ゆきよし）は天文方に任命されなかったが、三代目徳風（よしつぐ）以後、幕末まで天文方を継承した。なお、徳風（よしつぐ）の玄孫（やしゃご）愛山（あいざん）は、作家として知られている。

山路主住（ぬしづみ） | （之徹ゆきよし） | 徳風（よしつぐ） | 諧孝（ゆきたか） | 彰常（あきつね・金之丞） | 彰善（あきよし） | （愛山あいざん）

・ 吉田家

佐々木長秀 後に吉田秀長（ひでなが）が宝暦の改暦（宝暦暦）の際に西川正休（まさよし）の息子忠喬（ただたか）の作暦手伝となり、明和元年（一七六四）天文方に任じられ宝暦暦修正事業を命じられた。以後、吉田家は幕末まで天文方を継承した。

吉田秀長（ひでなが） | 秀升（ひでのり） | 秀賢（ひでかた） | 秀茂（ひでしげ）

・ 奥村家

奥村邦俊（くにとし）が明和二年（一七六五）に新暦調手伝となり、天明七年（一七八七）天文方に任じられた。一代限りである。

・ 高橋家

高橋至時（よしとき）が寛政七年（一七九五）に天文方に任命されたのに始まる。

至時（よしとき）の長男である景保（かげやす）がシーボルト事件に関与して獄死したため高橋家は二代で終わるが、次男の景佑（かげすけ）が渋川家の養子となっている。

高橋至時（よしとき）－景保（かげやす）

・ 足立家

足立信頭（のぶあきら）が寛政の改暦（寛政暦）のために高橋至時（よしとき）の助手となり、天保六年（一八三五）天文方に任じられた。

信順（のぶより・通称重太郎）は父信頭（のぶあきら）に教えをうけ、幕府天文方見習となり、星鏡儀をはじめ製作した。父に先立ち没したため、天文方の跡は子の信行が継いだ。幕末まで二代に渡り天文方を務めた。

足立信頭（のぶあきら）－（信順のぶより）－信行（のぶゆき）

幕末まで存続した天文方家

天文方の家系は断絶した家もあり、西川や伊能忠敬の師 高橋至時（よしとき）の子孫も幕末までは継承されず、最終的には渋川家・山路家・吉田家・足立家の四家が存続した。

『図表内数字の説明』

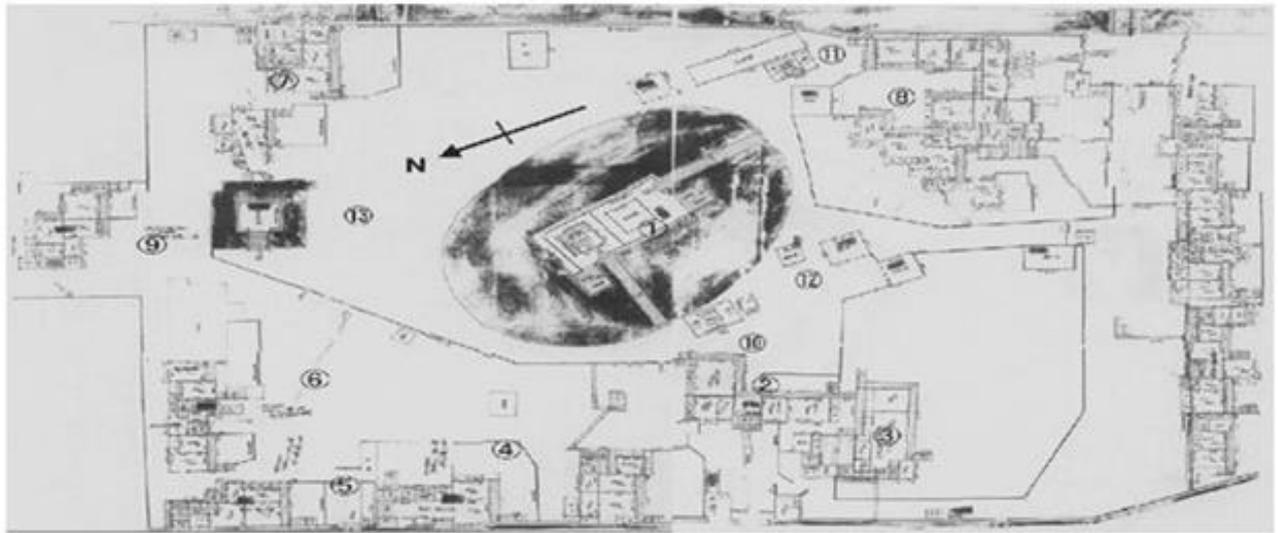
- | | |
|-------------|---------------|
| ① 簡天儀と象眼儀 | ⑨天文方取締柴山伝之助役方 |
| ② 頒歴調所 | ⑩子午線儀一 |
| ③ 天文方山路家居宅 | ⑪子午線儀二と圭表儀 |
| ④ 一⑥天文方手附役方 | ⑫観星鏡 |

⑦天文方吉田家役方

⑬黄赤全儀

⑧天文方足立左内役方

弘化三年（1846）～万延年間（1860-61）
【江戸浅草天文台 詳細絵図】 東京都公文書館の『順立帳』より



詳細絵図

弘化三年（一八四六）～万延年間（一八六〇～六一）に描かれたと推定されるこの詳細絵図は、東京都公文書館の『順立帳（じゅんたてちょう）』という明治初年の公文書綴の所蔵資料の中から東亜天文学会の会員で前任の歴史課長佐藤利男が発見したものである。

- ① 簡天儀は渾天儀の簡易版であり、ふつう天体の位置と運行の概念を説明する目的の装置。象限儀は恒星測量で緯度を測る基本的な測量機器。北斎は妙見信仰していたといわれ、北斗七星を測る装置とあって「鳥越の不二（とりごえのふじ）」を描いたのかもしれない。
- ② は頒曆調所（はんれきしらべしょ）で天文方が作成して京都の土御門家（つちみかどけ）で承認を受けた暦を暦問屋に頒布する役所。
- ③ が筆頭天文方の居宅で、この絵図のときは山路彰常（あきつね・金之丞）の住まい。伊能忠敬の入門時から第四次測量までは勿論、高橋至時（よしとき）が住まい、以後、伊能忠敬と孫・忠誨（ただのり）の死去まで高橋景保役所。景保が一度不始末で火事を出し、柴山伝左衛門（しばやまでんざえもん）が手伝い全焼には至らず済んだ。
- ⑨ その柴山の息子は成長して、天文台取締・柴山伝之助として⑨の屋敷に住んでいた。
- ④ ・⑤・⑥の屋敷は天文方手付け下役の役宅。
文政十一年（一八二八）九月シーボルト事件による幕府天文方・書物奉行高橋景保（たかはし かげやす）の失脚後は、筆頭天文方は山路弥左衛門諸孝（やまじやざえもん ゆきたか）があたる。この絵図のときには諸孝（ゆきたか）の息子の山路彰常（あきつね・金之丞）（弘化二年四月十二日・天文方となる）で手付け三人を使っていた。
- ⑧ の絵図の東南、天文台入り口近くには足立左内（あだちさない）役所が描かれている。天文方足立家はシーボルト事件で天文方を廃された高橋家に代わって登用された。この絵図の描かれたときには足立信順（のぶより）通称重太郎の子の糸之助（くめのすけ）が足立左内信行として足立役所に住んでいた。

- ③ 筆頭天文方 山路彰常（あきつね・金之丞）方（元高橋家役宅）
- ⑦ 吉田家役方
- ⑧ 足立左内信行役宅

三家は確認できても残り一家の渋川家については何も触れられていない。

その渋川家は、老中水野忠邦が失脚すると、天文方が組織維持のために太陽太陰暦の維持と蘭学を含めた洋学知識の独占を図ったものであったと渋川敬直（ひろなお）は罪を問われ、弘化二年豊後に配流（はいる）され、白杵藩主（うすきはんしゅ）稲葉観通（いなば あきみち）に御預けとなった。

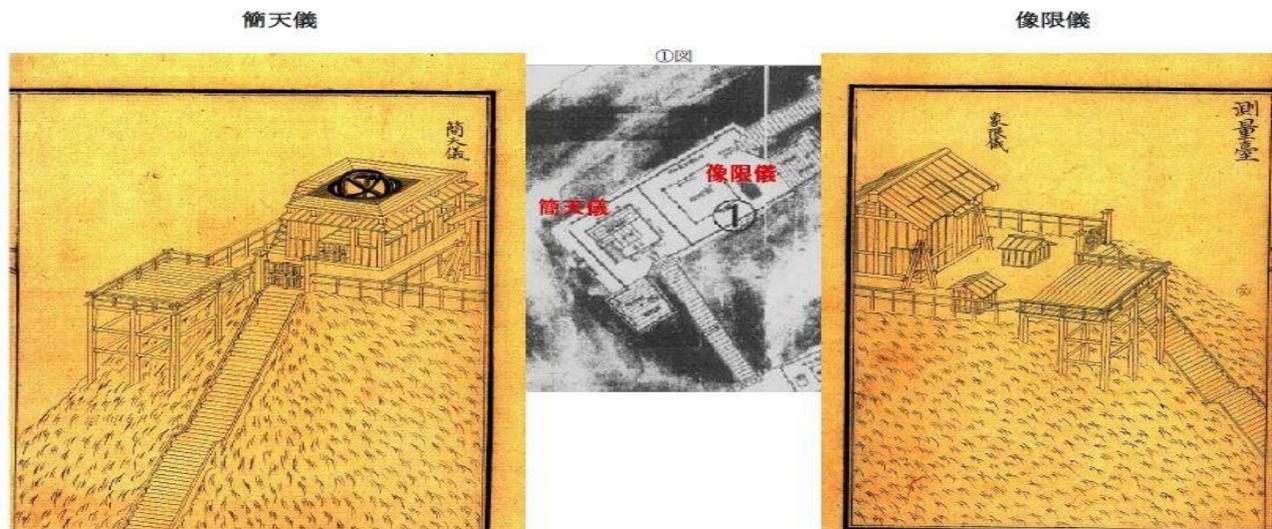
敬直（ひろなお）は廃嫡（はいちやく・嫡子に対し相続する権利を廃すること）され弟の佑賢（すけかた）が後継者となる。

弘化四年（一八四七）に天文方見習となり、安政四年（一八五七）三月に前年の父敬直（ひろなお）の死を受けて天文方を継いだがその年のうちに没した。この為、甥で敬直の嫡男である敬典（よしのり）が養子となって後を継いだ。

明治二年（一八六九）に天文方が廃された後は、敬典（よしのり）は大学星学局に属した後、東京天文台職員として出仕（しゅっし）した。

堀田仁助の師事した渋川家は春海（はるみ）以来の天文方の筆頭の家柄でありながらその末路は誠に哀れであったと言わざるを得ない。

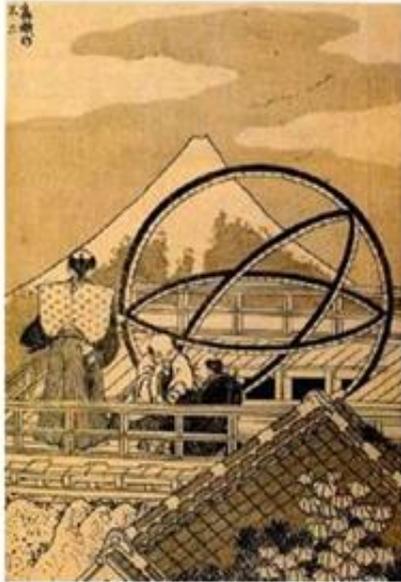
北斎の「鳥越の不二」と地図



鳥越神社（明神）の東に「天文屋敷測量所」があり、「頒曆調所」ともいい、曆や測量、地誌編纂や洋書翻訳を行っていた。

江戸城や大名屋敷など幕府施設の絵は軍事機密のためか浮世絵などに描かれていないが、どうやらここは許されていた。

(葛飾北斎「鳥越の不二」)



「鳥越の不二」の図の手前の屋根の上に蚌殻（かきがら）が置いてある。
当時、板葺き屋根の防火のために蚌殻を屋根に並べることが推奨されていたらしい。

牛込薬店（うしごめわらだな）より天明二年（一七八二）に天文・暦術・測量・地誌編纂・洋書翻訳などを行う施設として、現在の浅草橋三丁目一九・二一～二六番界隈の「浅草天文台」に移った。
寛政七年（一七九五）天文方となった高橋至時（よしとき）や間重富（はざま しげとみ）が「寛政の改暦」に従事したのはこの浅草時代である。

伊能忠敬が隠居後、寛永七年（一七八九）江戸・深川黒江町に移り住み、通ったのがこの浅草天文台で、高橋至時のもとに五年間通い、当時最高の天文暦学の勉強を行い、緯度一度の子午線弧長を実測しようと研鑽に励んだ場所であった。

廿日市生まれ津和野藩士 天文生堀田仁助

堀田仁助は、延享二年（一七四五）伊能忠敬と同じ年に廿日市津和野藩船屋敷に生まれた（註①）。天明二年（一七八二）六月三十八歳の時、天文方渋川正清主水（もんど）の暦作御用手伝を拝命。同年十月浅草天文台設置される。

五十五歳で蝦夷地御用を拝命

寛政五年（一七九三）四十九歳の時、幕府暦作御用手伝五人扶持となった堀田仁助は、寛政十一年（一七九九）三月十三日五十五歳で蝦夷地御用を拝命。

出立準備の最中の六月十五日仁助の師 渋川正清主水(五十六歳)が病死するも、悲痛のなか十二日後、同年六月二十七日、仁助ら八人、船頭・水主ら総勢三十一人は「神風丸」で江戸を出帆す。



「堀田仁助の蝦夷地海路測定事蹟」-新資料「蝦夷地開発記」に就いて-
内の挿絵を加工

神風丸御船ノ圖朱塗 千四百六十石積

アッケシに八月二十九日入津。六十二日を要した東蝦夷地海路測定の開拓という快挙を成し遂げた。おそらく、堀田仁助も江戸浅草天文台内にて寛政五年（一七九三）四十九歳以来、文政九年（一八二六）九月生年八十二歳相成、老衰、病身にて御在所（おざいしょ・実家）へ罷り帰りたい旨、公儀天文方へ申出、翌年春帰藩の達しあるまでの居所であった??と考えられる。

御用手伝の身分でありながら、幕府の天文方に重用され、三十数年に及ぶ出仕（しゅっし）は郷土の誇りでもあり、特筆すべきである。

自身の家族について唯一、仁助の二男堀田信輔が文化七年（一八一〇）十二月廿八日暦作御用手伝見習に仰付けられたことが「由緒書」（註②）に見える（仁助六十六歳）。

仁助の跡を継いだ格好であろうか。

この二年前（一八〇八）仁助は、佐方八幡へ石燈籠を寄進している（現存）。

石燈籠の銘文 文化五年威辰年四月十一日建之 天文生堀田仁助藤原泉尹（いずただ）

石燈籠に刻まれた「天文生堀田仁助」の銘に天文・地理に命をかけた仁助の意志の強さと誇りが感じられる。

註①「近世二本天文学史 下」渡辺敏夫 恒星社・厚生閣 一九八六年六月 卷末附録2
近世日本天文学史年表 延享二 九三一頁 (広島県立図書館蔵)

延享1 甲子1744 2.21 改元	1.3 彗星光芒甚，中旬より彗星見東方 晩天〔一〕 2.5 夜子上刻天中央より少し西の方へ 星現る嘉瑞也という〔武〕 2.15 午時乾より巽へ白氣横はる。長 半天，夜歳星犯月 3.12 子刻歳星入月中 4.18 夜見黒氣二筋東坤西北涉中天 5.6 夜星犯月 6.6 夜星犯月 今月客星出宿于心尾之間以上〔一〕 9. 日食，吉宗測 9.16 月食〔仙〕 吉宗簡天儀を親製〔泰〕	5.28 幸徳井保敬生 6.23 松永良弼没 本田利明生	2. 西川正休「三代歳首建正 之弁」1冊を著す 8. 山本格安「星名考」1冊 刊	オイラー軌道論 戴進賢「儀象考成」
2乙丑1745	2. 日食，吉宗測 北島見信長崎奉行所天文方 西川正休参府蘭人に天文につき質す 〔出〕 9. 吉宗將軍職を退く，家重9代將軍 となる	1.11 伊能忠敬生 堀田泉尹（仁助）生 吉田靱負生	山本格安「羊裘算法」，「算髓 鶏肋算法」刊 「安倍晴明物語」6冊刊	

堀田仁助の生年 延享二年（1745）については諸説あり。 渡辺敏夫 天文学者。

註②「古代文化研究第17号」編集発行 島根県古代文化センター 発行日 平成21(2009)年3月30日

(参考文献)

「堀田仁助の蝦夷地海路測定事蹟」-新資料「蝦夷地開発記」に就いて- 「高倉新一郎著 蝦夷往来第9号
所収」 (江別市情報図書館) 複写以来にて入手

「北方未公開文書集成 第4巻 「休明光記」 羽太庄左衛門正養」寺沢一、和田敏明、黒田秀俊/編
(広島県立図書館蔵)

「北海道と島根懸」島根懸郷友會 1931年 (北海道立図書館蔵) 複写以来にて入手

「伊能忠敬 測量日記」第一巻~五巻 編著者 佐久間達夫 昭和63年10月21日 (大野図書館蔵)

「日本北辺の探検と地図の歴史」秋月俊幸 北海道大学図書刊行会 1999年 (広島県立図書館蔵)

「近世日本天文学史(上・下)」渡辺敏夫著 恒星社厚生 1986/87年 (広島県立図書館蔵)

「北海道志 卷之二十八」 「海運」 (札幌中央図書館蔵)